

福祉実習教育方法に関する基礎的研究

井上桜・三富道子・渡辺薫

A Study on Formulating a System for a Field Practicum Program

INOUE Sakura, MITOMI Michiko, WATANABE Kaoru

はじめに

福祉実践は、すぐれて対人的対面的な性格を持っていることから、教育を展開する上で、サービス利用者についてどのように理解を図るかは、きわめて大切である。なんらかの理由で福祉サービスを必要とする人たちの生活に、自然な形で触れることが少ない今日、福祉の職業を志す若い学生たちは、「実習」という形の実践現場でこれらの利用者に出会うことになる。こうした場で利用者と出会い、直接的にかかわりを持った際の戸惑いも少なくない。戸惑いを受けてとめ、新しい人間理解へと深めていくことが福祉実習の大きな課題であると考えられる。

そこでわれわれは、1999年から2001年の県立大学教員特別研究の1つとして、「介護福祉教育における利用者理解能力の育成に関する研究」をテーマに、利用者理解を深めるための実習プログラムを作成し実施検証してきた。本研究は、その成果をより前進させるために、人権や人間の尊厳に視点をあてた新たな実習プログラムを作成しようとするものである。

1. 対象と方法

1) 介護福祉士養成校で使用している実習に関する資料の収集

静岡県内の養成校、複数の短期大学、4年制大学に資料の送付を依頼

2) 公刊されている実習関連のテキストの収集

3) 社会福祉士養成大学（含短期大学）に実習に関する資料の入手と聴き取り調査

2. 資料の入手結果

介護福祉士養成校—— 短期大学 1

専修学校 1

1校は、公刊のテキスト使用

4年制大学 2

社会福祉士養成校—— 短期大学 1

4年生大学 2

3. 聴き取り調査結果

社会福祉士養成校 3 校に福祉実習について聞き取り調査を行った。

インタビュー①

日にち：2004 年 10 月 22 日

時間：13:00～14:00

場所：619 研究室

インタビュー対象者：C 大学 D 先生

インタビューアー：三富、井上、渡辺

1. 実習時期、全体の流れ

井上：全体の流れというのは

D 先生：全体の流れというのは・・・。1 年次の時に見学実習に出てるんだよね。で、これが 3 日間。この 3 日は割と学生さんたちには評判はいいの。ほら全部がみえるから。3 日でいろんな福祉施設に行くの。児童福祉施設も行くし、老人福祉施設も行くし、児童養護施設も行くし、重症心身障害児施設にも行くし、要するにそういういろいろな種類の施設をバスで行ってみるの。そして順繰りに毎日見るの。みんながそれぞれを見るの。ローテーションを組んで。県内のいろんな施設をね。そうするとあ、こんな施設もあるのかってね。他の施設知らないから、全部見られる。

三富：それは、全部の施設について事前に勉強していくんですか。

D 先生：これが 10 月くらいで、その前に前半にオリエンテーションで、児童福祉を担当している人が児童福祉施設について、老人福祉論の人は老人の施設とか。ま、1 年生だから専門的なこと言ってもわからないから、「こういう施設だよ」っていうことを言っておいて、9 月の後半から動き出しているから。

三富：全体を考えながら動かすものね。2 年の前期の予備実習についてですが、さっき 1 週間て聞いたけど。8 月中旬から 11 月までに実施するって書いてある。ばらばら行くのかしら。

D 先生：そうばらばら。120 人がね。これはもう今度は現場実習Ⅱが 4 月からはじまるわけじゃない？ 2 年次の。見学実習をふまえて、今度は 1 週間やるんだよってということ。実習の目的をたてるわけ。見学実習に毛がはえたようなものだけど、見てくるだけじゃないよってことで。8 人くらいの教員が担当するのかな。15 人くらいの学生を一人が見る。その前に希望分野をとるわけ。児童か、老人か。そういうのにあわせて、老人福祉論やっている人は老人担当というような感じで、8 人が担当するんだけど、老人福祉を希望する人が多いから、老人のことをわかる人が 3 人とか。児童は行く先も少ないしね。そんな感じで教員の専門に合わせてそれぞれの担当を決める。ここは個別指導になる。だいたいそれもプロモーターの人たちが「こういうことをしてください」というのを手引きに従ってね。テーマを設定

したり、やってほしいことは共通に伝えられるが、どういう風にやるかはまかされる。全部で12回くらいあるのかな。最初は全体、後は倫理作法なんかがあるわけじゃない。グループでやるのは8回くらいかな。テーマなんかを書くのを8回の中で仕上げるという感じ。

井上：変わったプログラムをやっている先生はいますか。

D先生：だいたい同じかな。

三富：1週間ですものね。

D先生：名前を覚えてそれで終わりって感じだし。

三富：数が少なければいいんだけどね。

D先生：全員が社会福祉士を受けるということになっているから、こうなっちゃうのね。H大学みたいに中で削って、30人とか40人にするということがないからね。

三富：社会福祉士と精神保健どちらか選べというのではないんだもんね。

D先生：そう。全員だから。その問題もあるよね。社会福祉士は全員だから。オプションとして精神保健。2年生の実習後は、予備実習の後は振り返りを6、7回をやって報告書の作成と報告会だね。それがね・・終わった後ね、振り返りをやるってことで違う科目をあてている。援助技術演習。考え方としては予備実習をしました。それが頭にありながら援助技術で施設についての実際の事例を使いながら、やったりする。実際には振り返りはその中にある。そういう組み合わせになっている。これには実習のことしか書いてないけど。援助技術演習をやりながら、本実習に出て行くということ。帰ってきたグループで行う。帰ってきたからは集団はない。8回くらいある。

三富：スーパービジョンみたいなので、それです？

D先生：それは先生にまかせる。日誌や評価がかえってきて、後は先生たち。自己評価は出してもらうけど。ほとんどテキストなんかには則した感じ。僕はもう少し違ったシートを振り返りに使ってやっている。それをもとにグループでやって。そういうのをやっているうちに日誌が返ってくるから。そういうやり方だね。ま、熱心な先生は個別の時間をこれ以外に作ってやっている。先生次第。私は時間内にやりたいと思ってるけど。それで予備実習だから本実習でこういうところに行きたいとか、こんなところへ行きたいというのを出していくの。それで本実習に行くわけ。2年の後半、秋かな。希望をとるの。本実習は機関が入る。予備実習は施設だけ。それは就職対策もあるの。福祉事務所は沢山ないから、市内だけでなく、地元でやりますっていえば、地元でね。AとBの違いは機関があるかないか。機関も含めて4週間。

井上：機関と決めた人は4週間は機関ですか？

D先生：それはほとんどない。2週間。機関がいやがる。他のところになると巡回が増えるから大変。4週間同じだったら1回でいいから。だけど、どこも機関は2週間。私も去年は福祉事務所の担当で大変だった。大抵、6法でまわしちゃう。今日は児童、次は障害とか。福祉事務所がなげると、社協へいったりもするから。

井上：3年生の事前はグループごとでやりながら、グループごとに現場の人を呼んだりする

んですか。

D先生：担当ワーカーを紹介してもらったり、老人施設の職員を紹介してもらったり。

三富：全体はないんですか。

D先生：全体はある。全体のオリエンテーションも何回かある。実質中身でとれるのは8回か9回くらいかな。テーマが書けないとまずいよね。自分のグループに関しては「みなさんは介護実習でいくんじゃないんだから、こういう実習にしたいっていうのをきちんと出してください」って言う。私はね。1日1質問はしなさいよって言うわけ。そうすると1日1質問は良くない。何でもかんでも聞くって評判が悪くなるからって、こういわれちゃうわけ。質問したらね、逆にいろいろと職員から聞かれて勉強してないのがばれちゃって困りましたっていう学生もいるわけ。

2. 社会福祉士という資格についての教育

(1) どのような教員がどのように実施しているか

三富：この実習指導を企画している人は？

D先生：全部、地元のことがよくわかっている人が担当。県庁から移ってきた人。教員として。担当科目は障害者福祉論だったり、いろいろ。3人で。地元の人。県庁の場合、障害福祉課の課長やっていたとか、そういう人が田舎の新設の大学だから、そういう人入れて、そういう人より若い、児童相談所の所長だったかな、そういう人があたって、もう一人は地元の福祉施設の理事かなんかやってるそういう人。これら3人が地元の施設に顔がきくので根回ししてもらって、契約している。その人たちが実習は全部。マネジメントしてるの。1年から4年生まで。社会福祉士に関する実習は全部。

井上：授業の中で話す人もこの人たちですか。

D先生：授業は3人だけでは出来ないから多くの人で分担する。援助技術の人が入ったり、多くの人というのは、原理原論の人は、まわって挨拶はするけど、授業には入らない。現場実習1、実習2というのが前期に授業があって、9月に実際に行っておしまいになる。行った後にもフォローアップはしてるけどね。だから事前事後を含めてやるけど、そう沢山の人数ではやらない。見学が中心だから。スポットで何回かやって。

井上：個別指導とかはないんですか。

D先生：この見学実習に関しては個別はないかな。100人くらいを3つくらいには分けるけど、15人単位とかそういうことはない。

三富：便宜的に分けるといことですね。

D先生：課題とかそういうものない。ただ、見るだけ。感想を書かせるとかはあるけど。行った後は報告会もない。自分の感想をまとめるけどね。まさしく見学。

三富：主に地元の3人がプロモーター役をしているのね。

D先生：そうそう。1年から4年までのプロモーター。そろそろ交代してほしいって言うけどね。でも「地元じゃないと。僕らはよそものですから」ってね。

三富：現場実習を担える先生は何人いるんですか。

D先生：8人くらいかな。

(2) 教員の中に社会福祉士はいるか

井上：教員の中の社会福祉士は何人いますか

D先生：教員の中にはね、4人かな。助手さんに2人かな。いるね。

井上：現場で教員しかやっていない社会福祉士？現場経験のない社会福祉士？

D先生：みんな現場経験はもっているね。社会福祉士として現場をやっていたかどうかは別として。

(3) 養成する学生像

井上：養成したい社会福祉士像ってありますか。

D先生：なんだろうね。うたい文句はなんだろうね。なんていったら言いかね。

井上：個人的な思いはあっても全体としては難しいですか。

D先生：あんまりないんだよね。理念みたいなものはあるけど、うたってはいるけど、実習がらみの中での申し合わせや話し合いはない。国家試験はあるけど。国家試験だけ通ればいいのかってことになる。この間ね、F大学はどういう学生を養成しているかを教員の中で話し合っているというのをやっているという感じだった。でもね、聞いてみると、ただ話しをゴチャゴチャしているだけのような感じだった。でもね、ある先生がね「そんなことまでやって方針を統一することがあるんですか」って言っていた。

それぞれの先生がそれぞれに教えていくのであってそれを学生の中で統一していくのであって。

三富：ばらばらでいいのかもしれない。今のように金太郎飴型に近い人が増えてくるとね。この先生とあの先生は違う、どうしてだろう、って学生が考えたほうがいいのかもしれない。実習という中に金太郎飴の中身を盛り込まないようにしなければいけないよね。授業の間で学生は悩むかもしれないけど。そういう要素がないままに一本化しようとしているところに無理がある。聞いていて思った。みんな同じ方向に向いているのはおかしいかもしれない。

(4) 実習指導のねらい

3. 福祉実習指導について

(1) 実習前

井上：実習前に社会福祉士とは何かということをお話す先生とか現場の人とかいますか。

D先生：それは1年生のゼミみたいな。学校になれるためのものなんだけど。これは全部の教員に割り振ってるの。1人7人くらいの。基礎ゼミと称してやって、その中で社会福祉士を呼んでやっている。15回くらいあって3回を全体でやるんだけど、その中で呼んでやる。それぞれの現場の社会福祉士。実習とは別個にやっている。これは割りと良かったとい

う声が学生から聞こえる。ただね、話す人がね、「最初、介護として入ってやるといい」みたいなのは困るよね。介護を馬鹿にしているのかってことだよ。介護専門職だからね。介護福祉士をちょこってやってからって、そんなのおかしいでしょ。社会福祉士っていう現場そのものの仕事、社会福祉士ってどういうものっていうのをきちんと伝えられないと、ただ、国家試験を受ければいいなんて。

井上：やるときに学校側からの視点を伝えるのも大事ですよ。

D先生：そうだよ。

(2) 実習中・巡回中

井上：巡回は？

D先生：巡回は全員体制。9割くらいは担当した先生がまわるけど、まわりきれないから、広いから、K市に近いところまであるから、遠くは巡回だけの挨拶だけの先生に行ってもらおう。そんな感じでまわるのは全員で。15人くらいで。1週間に1回はまわるということで、必ず。しかも1週間しかないから、行く日にちが限られちゃう。真ん中で行ってあげたかって思っても重なってしまうから、無理でしょう？前で行くとか後ろでいくとか。もうひとつ3年生の巡回が一緒になっているから。平行して走っているから。だからこれが走っているわけじゃない。重なるわけ。これは通年といっても8月から11月くらいかということだから。

三富：原則として夏休み中に実施するってあるから。

D先生：だからなるだけ1週間の方はまわりたくないねって言ってるの。

井上：2年生の実習は1人ずつばらばらで施設に行くんですか？

D先生：なるだけ複数で行ける様にしているの。1人だとかわいそうだし、回る先が沢山になっちゃうから。だから、2, 3人で実習出来るようにしているの。だからこれが1週間だからプロモーターの人も巡回するのきつっていつてるの。トラブルが起きているところだけ、とか。日にちを短くするとか。1週間で来ないの？って言われると困るから。これだけならいいんだけど、現場実習Ⅱが一緒に走るから大変なの。ただ、実習のやり方としては丁寧なの。見学をしてから1週間の実習に出るからね。

(3) 実習後

D先生：実習後は全体でやるのはなくて、全体は報告会だけ。あと、報告書。10月の終わりまでには原稿を書いてくるの。だからせいぜい7回くらいの個別になる。最初のグループでやる。そうこうしているうちに評価、日誌が返ってくる。学生さんたちは日誌をもとに、報告書づくりをはじめ。まだ実習に行っている人もいる。僕のところは最初の2週くらいまでは一人二人くらいは実習に行っている。それがいない中でやっている。他の人の報告を聞きながら、報告書をつくる。11月に入ってきたら、個別に行って、12月には報告会。各グループから1人くらいでやる。報告書は全部でやるけど、10～12グループでひとりづ

つくらい出して報告会をやる。そんな感じ。本当は120人発表させればいいけど、それは大変だから、後半Bの後ろは8こま位がせいぜいかな。

4. スーパービジョンについて

三富：スーパービジョンってどんな感じでしょうか。

井上：個別が8回とかありますよね。その中でスーパービジョンでどうですか。

D先生：個別の中で実習してきたことを題材にしてということだけれども、統一して動いてないし、学生のばらつきがあるから、何も考えていない人もいるし、120もいるとね。スーパービジョン、ね、ほとんどこういう風にといいのはないかな。先生によるのかな。三富：福祉のスーパービジョンの考えがない先生がやろうとすると、駄目なんですね。

D先生：まだ、その辺が本当は実習を気付きの機会にするとか、実習を使つての学びを深めるということがあるのかもしれないけど、せっかく貴重な実習をやるから、そういうものとうまく結び付けていくことをしていかないと。意図的にはやられていないね。

三富：援助技術では先生は意図的にはやってない？

D先生：援助技術は予備実習の後、やるんだけど、1週間の実習では事例をもってくることは出来ない。ここの1週間の時に事例を持ち帰るのは無理。4週間あればいいけどね。

井上：本実習では事例をもってくるんですか。

D先生：ほうりこみの実習だからそういうのはないね。だから本当は実習で接した生の事例をどう持ち帰るかということも大事。そうすると実習の前に事例で学んだよってしっかり言っておかないといけないよね。この4週間で。担当をもたせてもらいたっていうので今回は担当をもたせてもらったりもしたけど。現場がまたね、記録見せられないとかっていうの。記録も見れません、その人のこともわかりませんっていう実習があるの。個別の人に聞かれたりするのが実習だもの。もう、学生帰しちゃおうって思ったりしちゃう。

三富：そうしてみると、現場の中にどう、社会福祉士を育てていこうというのが大事。

D先生：そうだね。社会福祉士会もやっているみたいだけど。社会福祉教育セミナーでも今度やるみたいだけど。この間の社会福祉学会でもあったし。体制作りが必要。

三富：昔は気にしないところがありすぎたけど、今はやたらとバリアで何もわからなくなってしまう。

5. 実習プログラムと他の授業との関連

(1) 社会福祉援助技術との関連

D先生：援助技術との関連だけど、そこも内容がいろいろと問題になるところだね。だから、教科書であるような援助技術を現場で本当にやっているかということだね。中身はかなり問題。教科書にあるのは大抵が相談機関で向かいあって相談をするということを想定しているから、でも施設における援助はそれとは違うから、そういうのをもつと現場に近い形にするには違うようにしていかないと。教育するところばかりだっても、現場と結びつかない

いわけだし。かなり問題ある。場面に問題がある。

井上：先生のところはずっと援助技術と一緒に走らせている、そのスタイルですか？

D先生：あとね、別個に援助技術とからませている。実習とからめてやっている。授業として、べつにあるということではなく、意図的にやっている。

(2) その他の科目との関連

(3) 別立てプログラムのようなものがあるか

D先生：高齢者の施設とういことではどうしても介護ということはさげられない。だから、介護の実習というのも絡ませてやっている。行く人はそのことも介護概論とか、介護実習とかやる。オプションで特別に開いて、この先生は熱心だから、行ったら困るからということでやってくれている。

井上：それはどのグループにいてもやってもらえる？

D先生：主に高齢者の施設だけだね。機関はあまりないけど。だから、彼女が希望があったらやるという、いわゆるオプション。介護の概論はやっているから車椅子の扱いや移乗などの時にどうするかとか、最低限のことを。実習に必要な技術的なこと。

井上：介護の技術を教えてもらっているのはいつなんですかね。

D先生：やるのは夏前。直前。3年生の夏前にやっている。彼女は介護と地域のことをやっているから、地域福祉みたいなこともやっている、そういう役割も担っている。それが大雑把な流れかな。

6. 福祉実習の課題

三富：福祉の実習ってわかりにくいね。社会福祉士にはりつくならいいけど、そうじゃないんだね。

D先生：だからね、社会福祉士にはりつかせればいいのかと思うんだよね。多分、はりついちゃ困るものもあるんだろうけど。社会福祉士っていうのもいつも人と会っているわけではなく、多くは事務作業だったりするわけじゃない？そういうのだと必死じゃないように考えている社会福祉士もいるわけじゃない？学生もそうだけど、何かやっていないと実習やっていないって考えちゃうから。でも、そういうのでいいんだよね。ありのままを見るっていうので。やってみたらどうかなって思ってるけどね。

井上：介護の現場もそうですよね。ただ居るだけでいいという介護もあるのに、介護ってやってなきゃいけないみたいなのがあって。だから、教員が介護って何かっていうことをどれだけきちんと学生につたえていっているかっていうことですよね。

三富：そう、そこが思いましたね。今回2週間だけだけど。職員としているとすごく多くのものを求められているんだけど、学生といるとわからないんだよね。それはだからどう動機づけして、学習途上にスーパービジョンって形で戻していかないと。事前と事後に熱いものがある。形としては現場実習は援助技術の先生が大きなものを担っている？

村上：そうだね。

インタビュー ②

日時：2004年12月7日

時間：10:00～11:00

場所：B 大学短大部

インタビュー対象者：C 教授

インタビューアー：三富、井上、渡辺

1. 実習時期、全体の流れ

回数	内 容
1	実習事前学習について
2	個別指導（前期実習計画書作成1）
3	個別指導（前期実習計画書作成2）
4	施設見学 2施設 3部門
5	個別指導（前期実習計画書作成3）
6	介護と介護の方法について
7	実習前オリエンテーション
	前期実習
8	実習事後学習（報告書及び自己評価表の作成）
9	個別指導（前期実習報告会の準備1）
10	個別指導（前期実習報告会の準備2）
11	個別指導（後期実習計画書の作成1） 前期実習報告会
12	個別指導（後期実習計画書の作成2）
13	実習前オリエンテーション
	後期実習
14	個別指導（後期実習報告会の準備）
15	後期実習報告会

2. 社会福祉士という資格についての教育

(1) どのような教員がどのように実施しているか

主担当が1名で、他4名

(2) 教員の中に社会福祉士はいるか

いない

(3) 養成する学生像

三富：そうすると学生像は項目としてこういうのがあるんだけど、具体的にはどういう社会福祉士像みたいなイメージありますか？

C教授：開学当初からは俗語ですが、相談援助業務が出来る保育士、社会福祉士と保育士のドッキングということカラーとして出しているけれども、それといっても専攻で合意をとっているわけでもないし、なかなか共通の理念はむずかしい。

(4) 実習指導のねらい

C教授：やっぱり一番目はあれですよ。利用者さんのニーズを把握するっていうか。ここはね、8つねあげてますけど、厚生労働省のシラバスからもってきているものですから、一番のねらいというのは利用者さんのニーズを把握する力を培うということ。

三富：短大としては1番ですね

C教授：短大としては1番と2番ですね。(実習計画書を見ながら)つまり、「施設や機関の役割を理解していく」という。ただ、ここにも問題点があって、現場実習というのはソーシャルワークの部分とケアワークの部分とふたつありますよね。必ずしも現場実習で送り出した学生がソーシャルワーク的なものを2週間の中で出来るかということ、受け入れる側の問題として相談援助向けのプログラムがあるかということ。6月と8月の2週間を前期実習後期実習って呼んでいるんだけど、2箇所同じところに行くパターンと違うところへ行くパターンがある。同じところへ行く場合は、前期はケアワーク的な実習で利用者さんの現状をみて、後期で相談員の実習に入ってくるようお願いしているんですよ。基本的なところで、実習生を受け入れる場合は施設の方で受け入れプログラムというのがなければなりませんよね。そこがまちまちで、それが今後の課題のような気がします。だから、4番目に専門的援助技術を理解するというのはかなり上の方の次元の課題であって、そこへいくまでの施設の基盤と送り出す側の条件整備がまだまだという感じ

三富：前期と後期同じで、前期でケアワーク的なものを学ばせるというのは何か特別なことがあります？

C教授：結局、前期、後期実習で受け入れるのは施設。機関は4週間行くことはまずない。相談援助業務を依頼するんだけど、まず、実態を理解してもらって事で

三富：施設の側がね、

C教授：そう、施設側が。ケアワークを通じて把握してもらいたいということで。学生も入浴、排せつの介助をしていく中でやっていく。2週間の実習で指導員さんが誰かもわからないで終わってくる場合もある。

三富：前期、後期受け入れてくれるところでは後期は相談援助ということで指導員がばっちりついてプログラムというのがあるんですか？

C教授：少しづつ定着してきたところがある。基本は前期、後期同じところへ行くと言うこ

とで想定してきたんだけど、社協とか機関の場合は前期後期では受け入れがたい。社協の本来の業務はせいぜい1日か2日で後は、社協のもっている施設とかで。

井上：社協に頼むプログラムと施設に頼むプログラムは違うんですか？

C教授：依頼する内容は相談援助業務ってことで、こうしたソーシャルワーク的な文章ここに入って居るんだけど・・・。これもあまり例外的でないものですが、社協のはこうやってほとんど日替わりですね。これなんかまあ受け入れが来ているし、その日ごとのプログラムがあるし、動きがわかるけど。例えば、福祉事務所行っても、1週間福祉事務所であとはデイとかね。

井上：それはこちらからはどういう依頼ですか？

C教授：具体的な項目は示していません。今の課題としては、手引きの中で一番最後に各施設、機関、だいたいこういうことをやってほしいというプログラムの実施例を出して、お願いしましょうということになってきている。例えば、大きな作りでこういうものを浸透させていくということが当面の課題。ある程度固定化していくことが大事。これは自分が作ったものですが。(プログラムの実施例を見せる)

三富：そうするとこれは生活指導員の分とふたつだけです？

C教授：ま、どの実習にしても3日くらいは同じようにして入っていくと思うんですよ。介護実習もね。施設の概要として入っていくんですよ。

三富：いや、介護実習は違います。オリエンテーションで終わってしまうから。概要は資料などをもって話しを終えて、即初日から寮母業務いきなり。学生がこういうことを聞いていかないと把握できない。施設からの提示はない。

C教授：施設、機関の全体像を知ってから入っていくのは基本ですよ。

3. 福祉実習の指導について

(1) 実習前

井上：学生が施設などを選んでもらうんですか。

C教授：D先生と学生が面接して詳細に希望の動機などを聞いて、面接して、時間掛けてやっているよね。D先生がきてから。前は希望をとってふりわけてやっていたんだけど、配属実習のプロセスは確かに大切なんですよ。ただ、来年度の実習依頼もまだしてなくて、そこは遅れすぎている。そういう問題点を解決するためにとりあえず来年度版の計画書の中には各施設の中で作成いただきたいプログラムを提示することと、1年、2年のいつの時期にどんな指導しているかということ、対施設にどんな文書依頼をしているかという事務的な流れを提示していく。それが現場に浸透していくのは3年5年かかるはずだけど、でもそうやって、やっけないと質は上がっていかないので。

三富：実習計画書、これらを個別指導でやっていく？

C教授：こういうのを実習行く前に個別でやっていく。ここが学生に理解しにくいみたいだけど、これがテーマでテーマを達成させるための課題とあとこれは報告書。

事前指導の実習プログラムは実習計画書でしょ、巡回記録、自分の場合はこうやって3回。前期実習でしょ。(用紙をみながら)グループ単位でやっています。こういう感じ。1回目、実習の概要と2回目特養向けの相談援助業務とは何か、3回目は実際に想定してのロールプレイ、実習評価はどんな風にされているか、巡回についてなど。共通的なことはD先生の方で全体指導をやっています。

井上:スーパービジョンに関わっている先生はある程度共通認識はもっているんですか?例えば、援助技術の先生は得意かもしれないけど、社会福祉士とちょっと違う部分での専門の先生は共通認識は?

C教授:この大きなくくりでこういうことっていうのはあるが、ほとんど個人の先生にまかせている。実習前は意欲を高めて、計画書を作る指導を実習後は報告会と報告書についての指導ということで。後は外部講師の方を呼んで話しをしてもらおうということですね。社会福祉士を呼んで。後は卒業生で社会福祉士をとった人を呼んでいる。ただ、内容をつめない。ただ、来てもらって現状を話してもらってもね。こことこういうところを中心に話してもらわないとね。講義の時間として話してもらおうので。現場の方に90分話してもらおうって結構大変だからね。お願いする手前いいにくい。

2年は1年の報告会にも参加させて、この期間で学生の希望に基づいて、面接をしている。善し悪しでね、面接するとまた変わるんですよ。ある程度、区切らないとね。話しを聞けば、そっちに行きたいってなってしまうし。依頼できなくなってしまう。10月くらいできて、人数を割り振っていかないと入らない。実際は。面接の意義は確かにあるんだけど。今年度は間に合わなかったけど、前期版、後期版をのせるつもり。(計画書?)シラバスの一歩踏み込んだものを入れていくといいかなと。

井上:個別をととても多くしている意味は。

C教授:結局、実習で行く職種がかなり違ってきているので。現場実習の特性。全体指導では限界がある。違う種別の話ししても他の人興味ないし。相談機関はほぼ一緒。施設も県内は限定されつつあります。限定していきましようってやっているから。

(2) 実習中・巡回中

C教授:学生の意欲を高めるということ言えば、第1希望、第2希望でいかないとむずかしい。電話での依頼からはじまるんだけど。A施設みたいに優先でやってくれるところもありますけど、他の養成校もあるから。施設確保は大変ですよ。7頁なんですけど、一番最後に実習先について書かれています。施設にわかってもらうためにも書いた。巡回は1回です。2週間に1回。規定は1週間に1回だけど、行ってもらえない。

個別指導での課題もあるし、助手さん行っても挨拶だけになっちゃうし。事前も知らないわけだから。現場は巡回は担当と話して、学生と話して担当と話すというような感じで巡回行ってるけど。

(3) 実習後

三富：事後のスーパービジョンもこれにあわせてやっている？

C教授：そうですね。あとこれが去年からかえた評価表ね。個別でどういう風にやっているかということですが、各担当の先生でつくっているんだけど。大雑把には項目は決まっています、こういう流れで何回やりますよ、ということ。(用紙をコピーして、その内容を読む) 報告会は3施設でひとつのテーマ。共通の問題点を話し合っ、それについて発表していくという形。前期実習は例えば、「高齢者施設における利用者理解」というテーマでデイと特養として、1グループ20分という形でやっている。

4. スーパービジョンについて

三富：スーパービジョンで先生が力を入れているのはどんなところですか？

C教授：やっぱり事前学習というのは実習に向けての気持ちを高めるとというのが一番大切。事後は感じたことを言語化して記録で残せることが大事。

三富：感動した、とかどこかにあったような。感動したことなど。

C教授：これかもしれないね。感動っていえば例えばある学生。福祉施設もはじめての学生。特養へ行って、施設のありかたを考えさせられた。ぼーっとしているお年寄りを見て。学生の素直な感情だね。でも施設からの評価は低い。何でもかんでも感じたことを書くというのではなく、書き方というのか、そういうところが難しい。施設はスピードで動いているから、評価にもいっぱい書かれてしまっているし。はじめての学生のモチベーションを高めることは大切。項目でやっていると思うんだけどもある程度、こういうものをチェックしていく必要がある。

5. 実習指導プログラムと他の授業との関連

(1) 社会福祉援助技術との関連

三富：実習指導とリンクさせて走らせている科目はありますか？

C教授：援助技術と援助技術演習ですかね。どういう風に連動しているかはわからないが。どう機能しているかという調整は必要なんだけど。当面は施設を限定して行って、その中にきちんと社会福祉士がいて、ある程度、援助技術現場実習の科目のイメージがつけられる相談員がいて、そういうことをやっていかんといけないと思う。

(2) その他の科目との関連

(3) 別立てプログラムのようなものがあるか

三富：特に現場実習として短大としての別立てのプログラムはない？

C教授：今はないですね。オリジナルという意味で言えば、計画書。これかもしれないね。

第三者に示す者は他のところではやっていないし、養成校協会では新しい委員会を立ち上げて、養成校における実習評価ということをやっていきますから、早かれ遅かれどういことをやっているかという文章がなければだめだと思う。

井上：ロールプレイってあるじゃないですか。これは先生固有のもの？ここではさきほどのくくりでいくと個別実習の実習指導ってことになっているので、他の先生はやっていない？

C教授：そういうことになりますね。高齢者の施設での会話などをとりあげてやってみる。イメージさせておかないとどうしていいかわからない。いきなりひじてつやられて高齢者こわくなるということもあるし。対象者を理解する、ニーズをどうやって理解するか、身体的、精神的な部分での理解。そこまで入っていかないと。この計画書は保育所ではかならず作りなさいっていわれているんだよね。規則に書いてある。現場はそれをうけて作ったと言う感じで。結局外向けの資料があるかどうか大事ですよ。形になったもの。どういう内容で展開しているのか、安全管理はどうしているか。

インタビュー③

日時：2004年12月17日

時間：16:00～17:35

場所：A大学 4年制大学 社会学部

インタビュー対象者

社会福祉学科 B教授 実習指導助手 C

インタビューアー：村上、三富、井上、渡辺

1. 実習時期・全体の流れ

三富：ホームページで見ましたが、2年生の後半から（実習を）登録履修し課題で振り分けていくようですが、どのような課題でどんな基準で振り分けるのか、どれくらいの人数が希望し、どのくらいの率で実習に出ているのですか？

C助手：まず、流れは、2年の後期、物理的な問題で1，2年はA県B市、3，4年がCの校舎に移ってくるので一貫して実習教育ができないこともあり、3年生から実習教育が始まる。2年生の後半からエントリーして、ガイダンスを受けてもらう、課題レポートを課す。

1ヶ月くらいの期限で。内容は、2年間社会福祉を学んできて、どういうことを身に着けたか、なににの科目についてはこういうことが解ったということではなくて、そこから社会福祉について何を学んだか、実習を希望する理由というのをレポートで提出させています。それを、スタッフが見て、2週間後に面接を全員行い、書いてあることと本人の思いが一致しているかどうか、レポートを読むと問題を抱えている学生もわかるので、振り分けをする。レポートと面接の結果を総合して、再面接の必要な学生には面接を行う。最終的に2月に成績が出る、成績が平均してBに満たない場合は、3年生の実習履修登録はできないことに

なっています。毎年平均して、120名前後の学生が1部（昼間）にはいる。エントリーは110名ぐらい、その後、10名ぐらい減る。結果、全体の8割ぐらいが実習に行くことになります。

実習の時期も「五月雨式」に6月の後半から12月まで行くので、常に誰かが実習に行っている状態で、それに対して細かい指導は個別にしている。現場実習は2単位で3回、で6単位、ほかの学校は多分2年の後期と3年の前期、後期で2単位ずつでやっているところが多いと思うが、2年の前期に講義として2単位、3年で「実習ゼミ」という形で実習指導を2単位ずつおいて、3年生の1年間で6単位取るようにしている。これも今年までで、来年からはB校舎がC校舎に移ってくることになったので、来年度の2年生後期から授業が始まる。2年間に分けて実習指導を行うことになる。来年は、旧カリと新カリが同時なので大変です。

2. 社会福祉士という資格についての教育

(1) どのような教員がどのように実施しているか

三富：具体的にエントリーまではわかりました。実習の計画書からは、どのような先生が何人ぐらいでどのくらい担当されていますか。

C助手：総括する教員は1人。私と、もう一人の助手と、大学院生で、ティーチングアシスタント（TA）がついている。細かい指導は、私たちとTAがする。基本的には、実習ゼミのなかで何かをするというよりも、個別に。実習ゼミも基本的には3つのゼミともB教授が見ている。我々3人が一人ずつ付いて、実質的な指導は先生が行い、責任は先生が持つが細かいところは我々が持つ。

井上：ほかの先生は？

C助手：準備段階に関してはノータッチです。巡回は全員で分担します。基本的な指導は。もちろん、デメリットもあるが、スタッフが全員の学生のことを把握しているので、誰がいつ来ても対応できるような形をとっている。

三富：総括の教員が結構しんどいですね。

C助手：そうですね。

三富：大体何年ぐらいで、

C助手：2年でチェンジです。

三富：毎回先生が変わると基本的な柱が少し違うのですか？

C助手：そうですね、そのやり方は、どういう講義をするか、ゼミをするかは担当教員に任せているが、事務手続きもあるのでいつの時期に何をするという基本的な流れは変えないでもらっています。

三富：総括担当の先生の力量が問われる以前に、助手さんの力量が非常に問われるということですね。

C助手：私は5年目なので長くやっているということがある。大体、院生からTAを経験し

て、助手をしている人が続いているので、なんとなく状況をわかっている人がやっている。状況が把握しやすいというのがあります。学生との密な分、学生からのニーズも把握しやすいので「こんなことをやったほうが、こういうことが解らないみたいです」ということを先生に伝えられるので。そういうことからだと思います。

三富：そういう意味では、実習と実習指導をきっちり連動していて、一貫している。プログラムは別にしながらも、で、巡回は他の先生は、担当されていない先生はご挨拶くらいですか？

B教授：あと、ゼミにうまく合わせています。3年のゼミと学生を意識して、配属しています。

村上：そうすると、自分のゼミの学生さんが実習に行っている時に、その先生が訪問する体制ですね。

B教授：特に助手の方々が多く行っていただいているんですが。

C助手：全く関係の無い先生が来る（実習施設に）ということは無いようにしています。2年のゼミの担当だった所も調べて、どうしても該当しないと我々が引き受けるようにしています。

B教授：助手でCなんかは、30位もっている。

C助手：今年は35施設です。常にどこかに行っている。遠い所だとか。

B教授：僕で15位ですね。実習指導担当で無い先生だと、5箇所ぐらいですね。

井上：数がだいぶ違うんですね。

三富：厳しいですね。もちろん助手の先生は多大なるエネルギーですけど。総括する先生も厳しいですね。

B教授：いろんな仕事がありますからね。そういうのは厳しいといえるかも知れないですね。

三富：実習の「講義」と書いてあるものの担当と、援助技術も持ちながら総括もされる？

B教授：基本的には全部持ちますね。

三富：ゼミも？

B教授：7コマくらい。今年、大学院も入れて9コマ。だから大変です。基本的に実習が増えるから。そこが、マネジメントの問題で、「総括するところだから主任クラス」と位置付けたら、コマ数だとか、入試とかの担当から外してもらえばいいの、それが無いのですね。しんどいですよね。全て、後期に打合せをしながら、半分くらい、助手の先生に主体的に係っていただいていますので、助手の人たちの存在というのは大きいですよ。

C助手：先生の負担を軽減するということもありますし、逆に、我々も講義する機会というものが無いので、そういう意味では勉強もさせてもらえるので、やりたいことをもちろん関連して、去年はジレンマのことだとか、自己覚知であったりだとか、助手で分担して講義をする。

B教授：教材作りみたいのを一緒に作って行って、それをまとめて紀要にだすとか、そういう助手の人たちが主体的にはしていただいている。ただ、A大学の社会福祉実習指導室って、

純粹に実習だけじゃなくて、いろんな先生の助手的なことも入ってきちゃうみたいな所も多分にあるんですよ。

井上：印刷してくれだとか？

B教授：そういうのもあったりする。現実、そういうところ、割と多いかも知れないですね。実習室に対する考え。使われちゃう。現実的にですね。それはやっぱり良くないですね。そういうことを良く聞きますね。大変ね。

あと、どうしても、A大学の助手の方々には1期2年で、2期4年までで、

井上：1期2年で、4年まで。

B教授：その間に業績を積んでもらうというのが前提条件なんですね。業績を積むのが一つの条件というところです。

C助手：他の大学の助手が大学院の同期であったり、友達であったりと情報交換をしながら仕事していますが、それぞれの大学に特徴がやはりあって、B大学などはウチとは学生の質も違いますし、B大学の助手が言うにはですが、「勉強は良くできるけれども、あまり熱意がないので、そこをどう教育していくかが課題になったりとか」違いが出てきているので。それぞれですね。

井上：学校によって違うんですね。

C助手：結局、助手として、ただの手伝いとして置かれているかということそうではなくて、「自分がここにいる意味があるんだ」ということは自負できるような環境にはおかせてもらっていると思っているので、正直、大変は大変ですけど、「ここでできればどこでもできる」と先輩たちからも励まされてきていますので。逆に、良くないところは、助手は全部卒業生なので、他の仕事までどんどん頼まれたりしますが、他の大学では、違うでしょうしね。

B教授：いま、逆に伺いたいのですが、実習担当の教員を募集するというやり方をしているところがいくつかありますね。実習専門のね。C大学はそうかな。そういうのが果たして良いのか、どうか？なかなか難しいかなと。そういうことを研究する人がいるのも、教員、研究者に、そういうことを研究していくことも重要なことだったりするんですけど。そういう人が居ると居ないのでは違いますよね。

三富：単体の実習だけというのは、連動してこないですよ。

B教授：何か持っていないとね。ゼミとか、援助技術とか持っている人は多いと思いますね。

(2) 教員の中に社会福祉士はいるか

井上：この関わっている先生の中に、社会福祉士の方は何人居ますか？

B教授：今は・・・

C助手：先生と・・・2人。

B教授：あと、ゲストスピーカーの良い人が居ますよね。現場に居る人で何人か、そういう人の声って良かったりしますね。

C助手：卒業生が多いことが、ネットワークがそういう意味では、卒業生がだめでも、「知

り合いの人で」という形で、院生も含めて、夜間の大学院もありますので、そちらは現場の経験が長い方も居て、そういうところから紹介して頂いたりとかします。だいたい、実習先には 1 人は卒業生がいますね。担当ではなくても。意図的にお願いしているところもありますが、偶然居たというところもありますね。

(3) 養成する学生像

B 教授：もう一つの考え方を今、議論しています。資格は、社会福祉士に特化していくものではなくて、むしろいろんな意味で汎用性があるんだという考え方をした方がいいんだろうという感じがするんです。入門的な社会福祉をベースにした、学士を持っている、ソーシャルワーカーを持っている価値というのは、非常に、利用者に側にとっても、企業に行っても消費者の側に立って、いろんな意味でやって行けますよね。そういう意味での汎用性があった方がいいんじゃないかと言うのを打ち出していけるって、鍵かなって思っているんです。

C 助手：社会福祉の考え方を良く知った、一般社会人を養成しよう。

B 教授：と、いうのも一つの方向性としてあるかなと思います。そこら辺の倫理綱領、倫理を持っていると言うのは消費者にたいして同じだと思って、三菱自動車の事件なんていうのは、不祥事に対しての構造と言うのは同じですよ。総合大学のようなところでは、そういう考え方はありかなと感じもしています。

村上：残りの 2 割が実習に行かないのですが、その 2 割の方に社会福祉的センスを持った市民の育成というのを意識的になさっているのかと思ったのですが、それは今後の課題なんですね。

C 助手：そうですね。今までは実習に行かないと「落ちこぼれ」みたいなレッテルを貼られてしまうような、誰も貼っていないのですが学生同士で気分的になっているところがあったのですが、それはおかしいんじゃないかと言うことで、インターシップが出てきました。さすがに、必修にしようという話は出ませんでした。全員行かせることに、意味や価値はあるのかということ。必ずしも現場に出たくて社会福祉学科に入ってきている子達ばかりではないので。行くためにいくつかの課題を課せられるので、今年は来年希望している子で、意外と脱落者が多くて、レポート出せないから辞めるとか、面接の時点で、ちょっと攻撃的にこちらから問いかけたりするので「耐えられないから辞める」とか、今年は結構多かったです。

B 教授：学生からしてみると、レポートも相当厳しいですね。合格しても、3月の成績で落ちるかもしれない。幾つかの関門があるわけですね。

C 助手：そうですね、自分で考えて行動できない子は駄目ですね。レポートもすごい漠然としたものの中で何を書いてくるのかとか、とかく指示されたことは良く出来ますが、応用力の無いのが見えているので、レポートに書いてあることを元に面接で聞くと答えられないとか、そこを指摘すると「もう行きません」と言ったりとかします。4、5年前まではレポートも課さないし、面接も形式的にやっていたが、それでは駄目になってしまって、だんだん

ハードルを高くしないと、結局配属先に出るまでモチベーションが続かなくなっている。「なんとなくみんなが行くから行く」では困るわけですね。それと、同時期に、大学がバア一とできて、それこそ「B大学」が出来て「D大学」が出来て、また同じところを実習先として取り合っていく中で、そんな簡単に百何人なんて出せないということで縛ろうと言うことになり、でもこちらの一存で切る訳にはもちろん行かないので、と言って課して行くと辞めていくし。

三富：なるほどね。厳しいなーという情景ばかりです、お伺いしていると。一応、養成する学生像は先生のお話から、私たちのイメージとして解るんですが、別に特化する訳ではないということなんですよ。

B教授：しかし、その中でも特化する学生がいても良いと思っていますね。

三富：そうすると、例えば特化してくる学生には意識的なメニューというのがありますか？

B教授：個人的な、教員の裁量みたいなどころになっていくような気がしますね。

三富：そうするとそれはゼミの先生。

B教授：そうですね、ゼミとかの気がしますね。あと、MSW実習というのももう一つかませているんです。

C助手：そうですね。MSWだけですね。コースとして。任意実習なんですけど、F大病院のMSWの方に協力していただいて、卒業生ですので、特別に講義をしていただいたりとか、実際の病院実習の手配もその方をお願いをして、我々が飛び込みで行くよりも、ワーカーの顔見知りの中でお願いをしたほうが。

村上：病院実習を希望する学生も何人か居て、それは、どういう形で採っていくのですか？

C助手：一応、こういうことがあるというアナウンスはします。D先生のゼミをとることが条件で、ただし非常に厳しいという話をして。毎年10人ぐらい希望して、実際に病院実習に行くのは、数名ですね。実習謝礼金も自己負担で、巡回の費用も全て。

村上：全くの任意だよということですね。

C助手：はい、学校は一切関知しないということで、それぐらい、MSWの実習は厳しいということですので。だいたい、実習に行った学生はMSWで就職しますので。そういう意味では特化していますね。後は、やっぱり、どうやって自分のことをアピールしていくかということで、ここによく来る学生は「就職どうしよう」と、個別に我々に声が掛かった時に、「こういう話があるけど、どう」という形で、来た者に対してはそれなりに出来ることはするというスタンスなので、そこで必要な時に関わりを持つ。

村上：精神保健はここでは無いですか？

B教授：無いですね。

井上：D先生はいつからやり始めたんですか？

C助手：D先生お任せするようになってからは、3年です。それまでは、ここでやっていたんですけど。やっぱり、いろいろお叱りも受けて「どういうことだ」と。なので、ちゃんとシステムティックにやる必要があるんじゃないかということで。ちょうど、実習委員会を

立ち上げたりとか、最近形骸化してますけど、したので、病院実習も。それまでは、3年次に現場実習に行っ、ほかの施設にも行きたいという学生には、任意実習でということで設けていたんですが、なかなかそこまで。誰が責任を持つのか、任意実習なので誰が責任を持つのか、出す側としては、大学の学長名で実習に出すわけですが、大学は責任を取れないと言われて、すごくもめて、その時、たまたま学部長が E 先生だったので、じゃあ学部長名で出そうということで決着つけて、書類上は学部長が責任者ということで出しています。

井上：MSWの実習を特化させた理由はありますか。

C 助手：F 先生がいらした時に医療福祉論を担当されていて、その時から医療関係に興味を持つ学生がいて、任意という形行ってきたみたいです。それを引き継いでいます。1、2名で自己開拓で行ってきっていたが限界もあったので。後は、病院も就職の選択肢の中に入ってくるので、例えば老健に就職する場合も、MSWの知識が少しあったほうが良いことを学生たちも自分たちで見付けてきて、ある意味、未知の世界ですから。そういう意味でその機会を潰してしまうのは可愛そうですし、それを我々がする権利はもちろん無いので、希望は最大限受け入れようというところだと思います。行かせない方法はあるんですが、そこは幅を広げるということです。

(4) 実習指導のねらい

三富：実習指導の狙いは

C 助手：総合大学ですので、社会福祉に特化しているわけではないので、社会福祉に強いというところはない、今の学生さんは、どうしても福祉をやりたいと言って入ってきている子たちばかりではないので、必ず社会福祉士を取りなさいと言って指導しているわけではないです。資格を取らなくても社会福祉に関わる道はあるという話をしながら、それでも行くのであれば(実習に)という話をしながら。あんまり福祉士に向けてといったところは、学校全体としても強くないので、実習に行くときも資格を取りに行くためではなく、ソーシャルワークは何かということを学ぶことを考えるようにということです。

3. 福祉実習の指導について

(1) 実習前

三富：面接されるのは、スタッフは、社会福祉現場実習を指導される先生ですか。

C 助手：そうです。担当の、B 教授と私と事務助手も実質、指導を行っている、この3名と、来年度担当予定の教員の4名で、今年は、学生数が少なかったが100名ほど登録していましたので、面接やレポートも行かせないためのものではなくて、モチベーションが低いまま実習に行くと、準備期間が短いので、計画書も書けない。モチベーションの確認と、自分から実習に「行かない」という選択をさせる。こちらからは「いっちゃだめだ」とは決して言わない。いろんな学生がいるので、実習に行くことで傷が開いてしまったりとか、そういう

ことは避けたいと思うので、そのために慎重に取り組んでいます。

村上：実習に「行かない」という選択をした学生に対しては何か別のプログラム、フォローがあるのですか？

C助手：いえ、3年生で行かなくても、4年生で再トライする、履修することはできるので、3年生で成績が足りなくて4年生でもできる。もちろん、同じ手続きを踏んでもらう。その方法があることを説明する。大体、実習に行かないという判断をした学生は、もともと福祉の現場に行かない、出るつもりが無く在籍している学生もいるので、そのことについては特にフォローは無いです。

渡辺：実習先の希望を採るのはどんなスタイルですか。

C助手：最初は種別しか聞かないです。いま、来年度のお願いしているところで、1月の段階で全員に受け入れ施設リストを配って、施設、種別、だいたいの所在地ですね。その中から選んでおいてもらって、2月の後半に成績が出て、3月に履修できる学生を発表するんです。その時に、個別にどこに行きたいのかを出してもらって、こちらで振り分けるという形です。ちなみに、最近では社協と福祉事務所に人気があります。ちょっと前までは、児童養護がすごく多かったんですが、「児童大変だから」と言いまわって……。たぶん「子どもだから大丈夫」といって希望するんですが、意外と保育が多くなってしまったりとか、虐待を受けている子どもも多くて。なかなか、弱い子が行くと大変なことになる。実習先としては、「知的障害」が圧倒的に多いので。

井上：社協の実習も、お任せですか？

C助手：社協は5箇所ぐらいしかないので、その年毎にお願いもしていたところもありましたが、社協の場合は、市民優先、市民限定というところがあるので、継続的にお願いできないところもあって、年々減ってきてしまった。もう一つは、出来れば4週続けて、2週に分けてでも4週間同じ場所で実習をやるというのが前提ですから、社協で4週間受けってもらうというのは大変ですので。「実習はちょっと」と断られてしまう。内容については特に言われたことは無いので、お任せしています。

(2) 実習中・巡回中

渡辺：巡回は全員ということですが、助手、AT、B先生を含めての全員ですか？

C助手：学科の教員16名、教員系の助手（事務系の助手は巡回指導できない）、2部（夜間部）の助手1名を含めて全部で18名で、170ヶ所ぐらいあるので、均等ではなく、分担している。

渡辺：地区はいろんなところに行かれるのですか？

C助手：基本的には100キロ、S駅から100キロ超える所には出せないなのでこの近辺で。たとえば実家が地方であっても、この近くで。基本的には自己開拓はさせていないので、全て長年お願いしているところの中で、学生に希望をとるが、実際は選んでもらうわけには行かないので。

三富：一応希望は聞くけど、基本的にはこちらで配属している。

C助手：はいそうです。

村上：それは長い期間「五月雨式」でやるからきっとそれのできるんですね。期限で実習するわけでないから。

C助手：そうですね、2部が立ち上がったことで、常に200名ぐらいの実習生がいて、それを一期間に納めようとするので、この地区は激戦区です。他の大学は夏休みに集中しているので。それをあえて前と後ろにずらしていることで、7月に3分の1が行き、10月に3分の1が行くので、講義にならないです。教養科目を含めて。その辺は、専任の先生方ほとんどなので、ご理解いただいて、がらんとした教室の中で授業をやっていただいている。

三富：実習中の巡回は2週間に1回ですか？

C助手：いえ、4週間の実習中に1回です。本当はだめなんでしょうけれど。施設のほうも来られても困ると言われるところも在りますので

(3) 実習後

三富：帰ってきてからは？

C助手：帰ってきてからは、必ず実習室に報告に来させるようにしている。そこで少し話しをする。今年は、グループでスーパービジョンをした。基本は、6人に対してスタッフが2人。学生から個別に話したい場合は個別に時間をとって、我々から、掘り下げが必要だということであれば呼び出してスーパービジョンをする。

三富：帰ってきてからは、実習計画に関わったB先生と助手、TAで全部やるんですか？

C助手：はい、全部やります。

三富：大変ですね。

C助手：ここしか知らないの・・・

村上：長い期間で実習に出て行きますけれど、後の方は、戻ってきてからのスーパービジョンの体制などは、どういう形で全員が乗っかっていかれるようにしているのですか？

C助手：後期がメインになりますが、ある程度が戻ってきた時点と、実習評価表が返ってきた学生から順にグループを組んで、後期から1ヶ月かけて、2箇所に分かれて3コマで、振り分けて1回に12人出来ますので、2箇所に分けて。早く行って、早く終わった学生はちょっと、間が空くのでかわいそうですね。逆に、帰ってきた翌週にスーパービジョンと言う学生もいたので、そういう意味ではいろんな所で差が出てしまうというのがあります。

村上：ここは、このスタッフで、全学生をやっているわけだからね。僕らのところみたいに、事前事後も分担してやっているみたいな体制じゃないからですね。わかりました。

三富：きついなという感じです。一貫性はありますけれどね。

B教授：それはありますね。2年生の時の我々との面接から始まりますからね。

村上：ずっと追いかける形ですね。2年間ね。

B教授：そうですね。そこで、良い学生はそのまま繋がって大学院に行ったりして、繋がっ

ていくこともありますね。

4. スーパービジョンについて

三富：ソーシャルワークを学ぶという広い、アバウトなことで、実習の内容はお任せという形ですね、帰ってきたときにソーシャルワークの学びに連動させる、スーパービジョンするにあたって強調される場所はどんな所でしょう？

B教授：帰ってきたときに、ソーシャルワークのアイデンティティを追いかけるとか、その前の総論などの援助系の科目のところでは、ソーシャルワークの価値とかおさえています。要するにソーシャルワークは価値の具現化ですから、それがどのように結びついているかについては、現場にソーシャルワークが無いので、非常に難しい。すり合わせが。逆に、きちんとそういうことを教えていけば教えていくほど、現場に行くと乖離が激しくなってきました。帰ってきた後のスーパービジョンでは、非常にギャップのところが多い。「社会福祉士を持っていても仕方がない」と言われたとか、ケアワーク中心だったとか、そういう声が圧倒的に多いのでスーパービジョンのあり方難しいというのが今の現実です。だからこそ、グループで報告会に向けて、いわゆる「ソーシャルワークは何か」みたいなことを、無かったかもしれないけれど、そこを想像していく形、もう一度振り返りながらストーリーをつくらせるというやり方をしている。グループで。また、個人的に問題のある学生に関しては、個人的にスーパービジョンを行っている。個人の場合はむしろ専門職という方向よりも、もっと自己覚知のところ、より個人のパーソナリティのぶつかり合いといったところを中心にやっていますよね。それ、大変なんですけど。

C助手：実習に、行ったことにより混乱して帰ってきたところに、「追い討ち」をかけるようにはしている。「福祉士」が居なくていいのかといわれれば、それは良くないというのは感じてくる。そのために自分たちはどうするのかというところを、報告書と報告会で言語化していくということです。

5. 実習プログラムと他の授業との関連

(1) 社会福祉援助技術との関連

井上：総括担当の先生は2年で変わるじゃないですか、その先生は、社会福祉士でなければならぬとか、援助技術系の先生であるとかというのは特にはないですか？

C助手：基本は援助技術です。そうでなかった時期も長い中にはありますが、ようやく援助技術系の教員がそろってきた。という関係もあって、この形の基本は10年ぐらいでしょうか、B大学のH先生がこの形をベースとして作られて、踏襲している。もちろん少しずつ変えてはきているが、ただこのやり方も、学生が増えたり、質も変わってきているので限界かなと。スーパービジョンが終わると、今この時期ですが、報告書の原稿を作成して、添削を、計画書を見たスタッフで行う。

(2) その他の科目との関連

(3) 別立てのプログラムのようなものはあるか

井上：実習に行く前と、実習に行った後の B 先生が行われる授業の中身は B 先生ご自身が考えていらっしゃるんですか？

C 助手：テーマも含めて基本的には一緒に考えます。「社会福祉士とは何か」漠然としたテーマに沿って、B の専門である「権利擁護」社会福祉士の倫理とか価値とかを徹底的に去年、今年はそのことをしました。たとえば、ゲストスピーカーに先輩（卒業生）を呼ぶ時には、人探しをしたりとか。

井上：担当される授業の中で、「ジレンマ」とか「自己覚知」とかありましたが、他にどんな項目をたてて授業を展開されていますか。

C 助手：後でスケジュールをお渡ししますが、今年は、アイデンティティや、倫理綱領をきちんと読み、医師や他職種のものを読み比べて見るとか、その倫理綱領を基に B 先生が細かく説明をしました。必ず、授業の後にふり返りシートを書かせていて、はじめのうちはどうしても「今日は何を聞いた」というような内容を書いてくるんですが、そこから何を学んだかを書かせる。それに我々がコメントをつけて返すことをしています。必ず 2 回ぐらい続けて講義を行うようにしています。基本的にそのあたりですね。

井上：そういうのは全然違いますね。授業の持ち方とか。

C 助手：今年は、2 人、社会福祉士の資格を持つ方に、ゲストスピーカーに来ていただいて、現場の様子、1 人は児童養護で働く卒業生の方だったので、ソーシャルワークの見え難いところで社会福祉士としてのアイデンティティをどう作っていくかみたいところを。結局、学生は現場の様子が入った話しのほうがすっと落ちていくので、そんなところで考えたりとか。去年は、福祉事務所の方にお話していただいたのですが、学生自身が福祉事務所をイメージできないところがあって、生活保護のソーシャルワークがよく解らない。私たちには面白かったが、学生には響かなかったみたいです。そういうところも踏まえて、話が上手かという所もちろんありますが、なるべく現場の声をどう届けるか。前は、施設長の方や、「措置」ということを捉えるために、事務の方に来ていただいたりして試しました。

三富：今年とはとりわけ、B 先生の研究について本領を発揮されるところが強くなるということもありますね。そうすると、来年担当される先生になるとまた違うメニューになりますよね。基本的なプログラムは変わらないけれど、核になる所が幾つか変わるという可能性は 2 年交代で在りうるということですね。

C 助手：私に関わってきた範囲では、B 先生で 3 人目なんですが「ソーシャルワーク」という軸はぶれないので、一昨年までは、I という教員が担当していたのですが、I もソーシャルワークに特化して、同じようなところ、倫理であるとか話をしました。その前は、J でしたが、「人に援助するとは何か」というところをとことんやりました。ゼミの中ではコミュニケーションスキルの話をしたり、実際にグループワークを取り入れたりしてやってきて

いるので、方法論やプレゼンテーションのしかたこそ違うけれど、基本的にはソーシャルワークという軸はぶれていないですね。それは2部の担当も同じです。そう考えると基本は、「人にかかわる」というところが何なのかというところかなと思いますが。

6. 福祉実習の課題

三富：実習では老人の施設はどれくらいの割合ですか？

C助手：今、高齢者は4分の1ぐらいでしょうか。

三富：とりわけ、我々は介護養成をしているので、わかりやすいのですが、高齢者施設の中でソーシャルワークが今、見るにはとても難しい現実です。ほとんど、ケアワークとして感じているところの、スーパービジョンのありかた、私たちはケアワーカーを育てているのだけれど、もうちょっとショーシャルワーク的な視点を取り入れていかないとほとんど機械型人間になってしまうので、そういうところを、どの位揺さぶられているのかというところをよく伺いたいと思います。

B教授：たとえば、特養などで、ソーシャルワークってどうなるかという、そこにきちんとしたソーシャルワーカーのモデルが居るか居ないかによってぜんぜん違う。居るところは幾つかあって、まだできていませんが、そこと実習のプログラムを一緒に考えていくことをしていかないと、こちら側だけでは無理だろという感じがしている。そういう意味では、社会福祉士を持っている人が居るある老人ホームでは、4週間の1週間目は介護を勉強するが、あと3週間は契約のところや、ケアマネジメントの作り方や、財産管理の問題や、家庭訪問するとかそういうようなところをやって、その中で自分が特養にいる中のソーシャルワーカーとしてのジレンマとかを話してくれる。そういうところと、共同研究みたいのをしてひとつのモデルを作っていくのは、あるかなといのは前から思っていますが、なかなか着手できない。そこが、やらなきゃいけないところであることはわかっている。基本的にはモデルが居ないとだめだという感じはしている。そこは、大学と実習先の連携をどう作っていくかが最終的なところ。それをもっと、社養協あたりがきちんとブロックごとに広めていくなどのあり方が必要ではないか。現実的に、対応策が実はないんです。すべが。理念に戻って、場面場面で対応している。学生側がそこですり合わせができるかがなかなか難しい。

C助手：介護が中心のところ、「社会福祉士は介護知らなくていいの」というところ、そこそこに介護技術を知らないといけないし、介護する時に介護職員の視点も学んでこなくてはいけないし、介護というベースの技術があって解るものもあるはずだから、そこを見てくるとい、なだめ方ですね。介護職が実習指導につくと「介護なんてやっていいの？」逆に言われてしまうことがあって、そこでそのことだけで悩んでしまう。介助することも手に付かないし、実習の目標を見失ってしまう。そんな時には、社会福祉士ということに特化しないで、「人に援助するということがどういうことなのかということ」を広く考えないとね」としか正直、対応できない。実習先に社会福祉士が必ず居なくてはならないという決まりがないので、ほとんど居ない。特にお願いできない。

B 教授：そういう意味では、H 大学さんは割りと人数が少ないですね。C 大学も人数が少ないので、割と選んで行くことができますね。2部を合わせて200名になってしまうと、確保するだけで大変になっちゃう。構造的な問題がそこにありますね。それから、新しい学校ができたり、なんかしくみ、外側とか変革があって、基本的に実習は実習室だとかというところじゃなくて、総合力ですよ。学科の総合力みたいのがあって、例えば、児童福祉論と障害者福祉論でもありますが、各論というのはそれプラス、ソーシャルワークが無いと話にならないわけですよ。そういうベクトルが教員の中できちんと合わさっているかどうかということがないと、全然話にならないって言う感じがしている。勝手に、老人福祉論をやってもらって、じゃあ、逆に試験対策的なことのすり合わせもばらばらですし、そういう所のチームというか、総合力のなかで社会福祉士養成どうしていくのかというのは、どの大学もできていないですね。それがまず基本にないと、最終的なし寄せが実習室に来てしまう。また、助手に来てしまうんですよ。そういう体系は良くないと思っている。そこらへんの、組織的にはどうして行くか、難しい問題だと思います。それがきつとできたとして、今度は現場とのすり合わせがまた次の段階でもあるんですけど。せめて、教育のところの教員のチームとしての社会福祉士養成のところのベクトルあわせと言うか、ベクトルがなかなか見え難いが、それをやらないとだめだろう。今考えられているのは、3年生では難しいんじゃないかというのが今の一つの方向性なんです。4年生で絞って行く事を考えている。3年で実習に行くと、4年で社会福祉士の試験勉強をしなくなる。学生たちのモチベーションだとか、昔と比べると、いろんな意味で社会性も低くなっている。実習も見学実習ですもんね。いう感じがしないでもない。そういう意味でどうなのかな。むしろ、今考えているのは、もっともっとソーシャルワークを調べてインターシップとかを大学がやるんですよ。そこで、例えばプレゼンテーションの力だとか、企画力だとか、チームワークを作っていく力とか、そういうのを、インターシップみたいところでチームを組んで強化をしていく、本来実習でやらなければいけないところを、そういうところでやらなくちゃいけないのはありますね。本来なら、個人的な考えは、社会福祉士は、マスターレベルだと思いますね。そこでやっていかないと、今の現場を改革して行くのは難しいと思いますね。通信であるとか、地方の専門学校含めて、そういうものを排出して行くのは、結局の所、人権侵害者を大量生産しているじゃないかと思うこといっぱいありますね。本当は、市町村実習とか、社協でも、コミュニティに係る、共同募金ばかりやるんじゃないで、そのほうがなんかあるじゃないかなと思いますね。

C 助手：養成する学校側ばかりが時代の流れを追って、カリキュラムを変えたりしているが、受け入れてくれる現場は10年経っても、15年経っても何にも変わらない。正直、そこがすべてだと思う。いまだに、評価も面倒くさいというところありますし、あえて学生に見せるために記述式に変えたのに、点数化にしてくれという要望が出たりとか、実習ノートのコメントは書けないけど良いかと言われたりとか、こちらがいくら働きかけても、忙しいのは重々承知していますが、8割、7割ぐらいの所は、受けてあげればいいんでしょみたいな感

じですね。中には、熱心にやってくださるところもあるので。

B 教授：やっぱり、地域を基盤とするような動きになってこないと、ケアワークだけになっちゃいますよね。完結しちゃって。その中ではソーシャルワークが展開できない。学術会議でも「ソーシャルワークが展開できる基盤作り」みたいな話に今なっていますが、そっちをきちんと、どうしていくかということを考えないといけないかなと気がします。良い施設に行った人は、モチベーション高くなるというのは事実だと思いますね。

三富：モデルがしっかりしていれば。

B 教授：あと学生自身のモチベーションとうまく繋がってくるとか、そういうのは、多分ですね、実習と実習先とかじゃなくて、1年時からの積み重ねであるとか、良い先生、助手たちとの繋がりとか、そういう関係ですよ。なんとなく良い学生を見てると、そうやってつながってくる、そういう総合性なんですよ。

C 助手：学生が我々とも、コミュニケーションを取れなくなっている。基本的には開放していて、来るもの拒まずなんですけれど、うまく使ってくれば良い訳ですが、それが出来ない。だから、この扉は、実際、重いのですが、一步入って来るまでが出来ない。それが、ずっと出来てくる子たちは、現場に出てもうまくそれをやってくれる。それこそ、実習担当の方ともそうですし、利用者の方ともそうです。1、2割位いますね。

B 教授：D 大学などは、2回に分けてやっていますね。2年次に半分行って、また4年次にもう一度行く。そのやり方もあるかな。もう一つの方法かなと思います。それと、E 大学みたいな、週1で年間掛けていく。E が出来るのは、あの人数ですからね。それから、それぞれ種別で教員が1人付いて行ける。フィールドインストラクターみたいな人も、D 大学はフィールドインストラクターきちっといるということで、実習訪問してくれる人が居る。それはいいですね。

7. 実習指導室の役割

B 教授：そういう意味ではよろず相談的な所でもあって、関係の取れている学生にとってはオープンなのでいいです。そういう意味では、来年度から、1、2年生まではB 校舎と分けられていて、あちらには実習室がないですから、1、2年生に対して関係性が無かったものですから、今度は一貫してこちらに来るので、1年次からいろんな形で関係性がとり易くなる、学生来やすくなるので体制をどういう風に変えていくかという話になってくる。一番最初に実習室と係るのは実習のレポートを書かせるという、相当レベルの高い所だったので、今度は違う形にはなると思いますけれど。一貫になるということで、カリキュラムをちょっと変えようという話で、1年生のゼミをどうするか、2年生のゼミをどうするかということ、実習にうまく繋がるようにするためにどうするかということ、カリキュラムの内容を変えようとしています。1年生のゼミは例えば、書けること、「読み書」を含めて、2年生になると自分の表現が出来るかどうか、プレゼンテーションや、ディベートなどを意識してゼミをやっていく。その中で、1、2年あたりで特に心の問題を含めてキャッチする体制

を作っていかななくてはならない。ゼミや教員の実習室との連携もこれから重要な所になってくると思います。

村上：ゼミは小さい単位ですから、それを意識的に実習と、巡回なんかとも関連させながらということなのですが、そういう他の先生たちと、実習の係りながらのつながりというのはどうやって、体制的につくられているのでしょうか。

B教授：やっぱり、実習の総括もそうですが、今後はより、学科長や主任レベルの人たちがどうマネジメントしていくかということだと思います。今まで、バタバタとやってきた感じがあるんですが、これをきちんとマネジメントできるかですね。

村上：そういう意味で、総合力でということですね。

B教授：そうですね。やっぱり総合力ですね。そこが無いと。今、1部と2部があって、大学院も1部と2部があって、後期課程もあるので、五つの大学をもっている感じでなんですね。

三富：一手に、ここで、このスペースだけですね。あまりの多さに驚きました。

B教授：ラッシュアワーがあるんです。時期もありますし。

C助手：5時までを1部の学生の時間、3時から8時半までを2部の学生の時間と分けています。大学院の実習に行かれる学生さんは少ないので個別対応です。大学院は問題なく、基本的なことは学んでいますし、大現場経験されている方ですとか、あと、看護師の方が多いいので、大学院に入って資格を取るとか。

三富：資格は解るんですが、そのへんの矛盾みたいのはありますか。

C助手：もちろん、矛盾はあるみたいですが、必要だと思って来ている方や、あとは、現場というより看護学校で教えている教員だとか、介護福祉士の学校で教えている方が勉強を含めて来ているところが多いので、2部の学生さんの中にも看護師の方がいるので、実習するにあたって、看護的な視点と、ソーシャルワーク的な視点との中でジレンマがあったり、葛藤があったりとかということは出てきているみたいですが、そこは、2部の担当教員がうまく対応しています。

三富：葛藤があって最終的に重要な所に行きますか。

C助手：行かない学生もいると思います。でもそこは、自分がこの先どうするかということ考えた時に、その資格をどうしていくのか。今年初めて卒業生が出るので2部のほうの、まだわからないですが、うまく分けて考えているのかもしれないですし、その辺はちょっと聞いてみないと解らないです。

おわりに

本年度は、研究初年度であるため資料の収集と主に社会福祉士養成校での聞き取り調査を行なった。聞き取り調査内容からも分かるように、それぞれの大学・短期大学が目指すところは様々であった。次年度以降は、更なる社会福祉士養成校の聞き取り調査に加え、介護福祉士養成校の聞き取り調査を行う予定である。